報告

「西アジア考古学トップランナーズセミナー」の開催に関して

安倍 雅史

West Asian Archaeology Top Runners Seminar

Masashi ABE

1. トップランナーズセミナーの開催目的

近年、西アジア考古学を学ぶために、大学院に進学する学生の数が大幅に減少している。そのため、将来的に研究を担っていく若手研究者が不足するなど、学問の存続を揺るがす深刻な問題に発展していくことが予想される。

また、現在、文部科学省は「学習指導要領」を全面的に改訂し、2020年度以降、新しい授業内容を導入することを目指している。現在の高校の必修科目である「世界史」が廃止され、日本と世界の近現代史を中心に学習する「歴史総合」という新たな科目が必修科目に採用される。そのため、高校時代に古代オリエント史に触れる機会が少なくなり、結果的に、大学院に進学する学生数の減少に拍車をかける可能性がある。

このような状況を危惧し、2016年度より日本西アジア考古学会企画委員会[1]は、中学生や高校生、大学生などの若い世代に西アジア考古学の魅力を伝えるため、研究の第一線で活躍する研究者（トップランナーズ）との交流の場として「西アジア考古学トップランナーズセミナー」を開催している。

2.「第1回西アジア考古学トップランナーズセミナー」の開催

2017年2月5日（日）に、上野の東京国立博物館黒田記念館において、「第1回西アジア考古学トップランナーズセミナー」を開催した。

今回、セミナーを開催するにあたり、考古学や歴史のクラブを持つ首都圏の高校にポスターを郵送し、また読売新聞の中高生新聞に案内を掲載するなど[2]、入念な準備を行った。その甲斐もあり、セミナーは大盛況であった。会場には、計73名（うち25名が大学生以下）もの参加者が集まった。最年少の参加者は小学4年生で、お父さんと一緒に最前列に座り、熱心に講演に耳を傾けていた（図1）。

今回のセミナーでは、エジプト考古学の分野から『ツタンカーメン　少年王の謎』（集英社）の著作で知られる河合望会員（金沢大学）と、人類の起源と拡散、農耕・牧畜の起源をテーマに活躍する門脇誠二会員（名古屋大学）の2人に講演を依頼した。河合会員、門脇会員は、それぞれ「エジプト考古学への招待―発掘調査から古代エジプト史を再構築する―」、「西アジアの遺跡調査から探る人類史―人類の進化と農業の起源―」と題した講演を行った。

今回、講演者のお二人は、研究成果だけではなく、かなりの時間を割いて自身の研究の歩みについて語った。

河合会員がはじめて古代エジプトに触れたのは、小学1年生のとき、児童向けの図書『ツタンカーメン王の秘密』（講談社青い鳥文庫）を読んだのが最初であった。そして小学4年生のときには、東京国立博物館で開催された展覧会において古代エジプトの遺物に触れ、エジプト熱がますます高まっていったという。

中学のときには、西武美術館の展覧会において吉村作治先生に出会い、これがきっかけとなり、エジプト考古学者になる進路を決意した。高校1年生のときには、日本国内ではじめて発掘調査にも参加している。また、知人を通じて近藤二郎先生に出会ったのも、この時期であった。

その後、早稲田大学に進み、大学2年生のときに古代エジプト調査室のメンバーとしてエジプトに渡航する。その後、アメンホテプ3世墓の調査に参加し、本格的に古代エジプト研究へと足を踏み入れていく。

北海道の函館生まれの門脇会員の場合、実家のすぐ脇にジャガイモ畑が広がり、そこが縄文時代中期の遺跡であった。幼少期に、父親と一緒に、畑のなかに散乱する土器片

図1　第1回西アジア考古学トップランナーズセミナーの様子
最前列に陣取り、河合会員の講演に熱心に耳を傾ける小学4年生

西アジア考古学　第19号　2018年　75-77頁
© 日本西アジア考古学会

図2　第1回西アジア考古学トップランナーズセミナーの様子
会場には、小学生から大学生まで若い世代が多く駆け付けた

図3　第1回西アジア考古学トップランナーズセミナーの様子
門脇会員による講演

や石器を拾ったのが考古学との最初の出会いであった。しかし、その後は、熱心な考古学少年へと成長することはなかった。

東京大学に進学後は、山梨県で縄文遺跡の発掘調査に参加するなどしていたものの、卒業論文では、東京大学総合研究博物館に所蔵されている西アジアの実物の石器資料を用い論文を書くことになった。

東京大学総合研究博物館には、1956年の第1次東京大学イラク・イラン遺跡調査団以来、西アジア各地で収集された膨大な数の標本資料が所蔵されており、こうした貴重な標本に触れたことによって、西アジア考古学に魅了されていったという。

大学院に進学後は、シリア、ユーフラテス河沿いにあったテル・コサック・シャマリ（Tell Kosak Shamali）遺跡の発掘調査に参加し、西アジア考古学の魅力にますます憑りつかれていく。その後、門脇会員は、本格的に、西アジア考古学を研究するために、アメリカ、カナダへと留学する。

講演したお二人が歩んできた道のりに関する話は、来場していた小学生や中学生、高校生、大学生にとって、今後の進路を考えるうえで、非常に参考になったと思われる。

セミナー終了後は、会場を国際子ども図書館のカフェテリアに移し、講演者の2人を囲んで茶話会を行った。参加した学生から講演者へ寄せられた質問の多くは、進路に関するものであった。飲みに行きたい気持ちを抑え、1時間近く茶話会に付き合ってくだった講演者や企画委員、そして田尾誠敏会員、小髙敬寛会員、馬場匡浩会員に、この場をかり感謝を申し上げたい。

3.「第2回西アジア考古学トップランナーズセミナー」の開催

第1回のトップランナーズセミナーが好評だったため、第2回のセミナーを開催することとなった。第2回のセミナーは、古代オリエント博物館と共催という形で、2017年の11月26日（日）に、池袋のサンシャインシティ文化会館7階の会議室で行われた[3)]。今回のセミナーも好評で、計75名（うち13名が高校生から大学院生）もの参加者があった。

今回は、西アジアにおける農耕・牧畜の起源をテーマに活躍されている前田修会員（筑波大学）と聖書考古学の分野から『旧約聖書の謎』（中公新書）の著作などで知られる長谷川修一会員（立教大学）に講演を依頼した。前田会員、長谷川会員は、それぞれ「古代西アジア1万年前の世界へ―遺跡と遺物が語る文明以前の人と社会―」、「聖書考古学の魅力―旧約聖書の遺跡を掘る―」と題した講演を行った。

前田会員は、発掘調査に参加してきたハサンケイフ・ホユック（Hasankeyf Höyük）遺跡やテル・エル・ケルク（Tell el-Kerkh）遺跡、アカルチャイ（Akarçay）遺跡、サラット・ジャーミー・ヤヌ（Salat Camii Yanı）遺跡などの発掘成果を挙げながら、西アジアにおける農耕社会の発展をわかりやすく説明した。また、前田会員が近年行っている新石器時代の「鎌刃」と「黒曜石」に関する最新の研究成果も合わせて紹介した。

長谷川会員は、発掘調査に携わってきたエン・ゲヴ（En Gev）遺跡を事例に、近年の聖書考古学の動向と魅力に関して論じた。また、現在調査をしているテル・レヘシュ（Tel Rekhesh）遺跡の発掘成果や、発掘調査時の隊員の生活ぶりをユーモアを交え、わかりやすく紹介した（図4）。

講演後には、津村眞輝子会員（古代オリエント博物館）が、セミナーの参加者を対象に、古代オリエント博物館展示室内においてギャラリー・トークを実施した（図5）。今回、古代オリエント博物館のご厚意により、博物館の入

図４　第２回西アジア考古学トップランナーズセミナーの様子
長谷川会員による講演

図５　津村会員によるギャラリー・トークの様子

場料を無料にしていただき、またワークブック「古代オリエントをたのしむ」を参加者全員に配布していただいた。この場を借り、感謝を申し上げたい。

また、第１回のセミナーと同様に、セミナー終了後に、茶話会を実施した。茶話会には、高校生や大学生が少なからず参加し、「研究者を目指すならどのような進路に進むべきか？」など具体的な質問を講師の２人に投げかけ、講師も真摯に質問に答えていた（図６）。

図６　セミナー終了後の茶話会の様子
前田会員に熱心に質問する学生

4. おわりに

今回、日本西アジア考古学会企画委員会は、若い世代に西アジア考古学の魅力を知ってもらうため、「西アジア考古学トップランナーズセミナー」を企画した。セミナーに参加した学生のなかから、１人でも研究者が育っていただければ望外の喜びである。来年度も、ぜひ第３回のトップランナーズセミナーを企画したい。

註

1）2017 年度現在の企画委員会のメンバーは、河合望（委員長・担当幹事）、安倍雅史（担当幹事）、和田浩一郎、野口淳、長谷川敦章、間舎裕生である。

2）中高生新聞への掲載に際し、読売新聞社の清岡央記者にご協力いただいた。この場を借り、御礼申し上げたい。

3）第２回のセミナーは山田綾乃会員（早稲田大学）にもお手伝いいただいた。この場を借り、感謝を申し上げたい。

安倍 雅史
東京文化財研究所
Masashi ABE
Tokyo National Research Institute for Cultural Properties